

# モニタリングサイト1000 陸生鳥類調査 情報

2025年 9月号 Vol. 17 No. 1



Sittiparus varius  
Photo by Toshifumi Miki

## 結果速報

### モニタリングサイト1000 2024年度越冬期 一般サイト結果速報 奴賀俊光・森本 元（日本野鳥の会）

全国約1,000ヶ所のモニタリングサイトのうち、森林・草原の一般サイトは約420ヶ所に及びます。調査には、多くの市民調査員のみなさまにご協力いただいております。森林・草原の一般サイトでは、概ね5年に1度、陸生鳥類調査(繁殖期および越冬期)および植生概況調査(繁殖期のみを実施)を行っています。2024年度の越冬期は、調査を73サイト(森林59サイト、草原14サイト)にお願いしました。そのうち、調査を実施できなかったサイト等を除き、現時点でデータが集まり集計が完了している森林49サイト、草原14サイトの計63サイトのデータを用いて、中間報告いたします。

### 越冬期に記録された鳥類(2024年度)

種名や種数は2024年度から日本鳥類目録改訂第8版に準拠しています。2024年度越冬期調査では、合計120種(森林87種、草原95種)の鳥類が確認されました。これは、2023年度調査結果の130種より10種少ない種数でしたが、2019年度から2024年度までの最近6年間(過去5年+今年)の記録種数(103種~130種)、実施サイト数(57~66サイト)と比べると、2024年度の結果は過年度までの範囲の中にあり、年変動の範囲内と考えられます。なお、森林よりも草原の方が確認種数が多かったのは初めてのことです。2024年度は、いくつかの草原サイトで湖沼に隣接したサイトがあり、カモ類やカモメ類などの水鳥の種が多く確認されたためと考えられます。

森林サイトを比較したところ2024年度(49サイト、87種)は2023年度(47サイト、92種)より2サイト多く、5種少ないという

表 1. 2024年度越冬期の森林サイト(n = 49)の上位10種

a) 出現率			b) 優占度		
順位	種名	出現率	順位	種名	優占度
1	ヒヨドリ	100.0	1	ヒヨドリ	14.4
2	ハシブトガラス	91.8	2	エナガ	12.5
3	エナガ	87.8	3	メジロ	8.1
4	コゲラ	85.7	4	シジュウカラ	6.7
	シジュウカラ	85.7	5	ヤマガラ	5.5
6	メジロ	71.4	6	ハシブトガラス	5.2
7	ヤマガラ	69.4	7	コゲラ	4.8
8	カケス	61.2	8	ヒガラ	3.0
9	シロハラ	53.1	9	マヒワ	2.9
10	ウグイス	49.0	10	シロハラ	2.2

表 2. 2024年度越冬期の草原サイト(n = 14)の上位10種

a) 出現率			b) 優占度		
順位	種名	出現率	順位	種名	優占度
1	ハシブトガラス	85.7	1	ヒヨドリ	15.4
2	ハシボソガラス	78.6	2	ホオジロ	5.9
	ヒヨドリ		3	タンチョウ	5.8
4	シジュウカラ	64.3		マヒワ	
	ホオジロ		5	ハシブトガラス	5.6
6	トビ	57.1	6	アカゲラ	5.0
7	ツグミ	50.0	7	カルガモ	4.7
8	カワラヒワ	42.9	8	オオハクチョウ	4.1
9	アオサギ、アオジ	35.7	9	スズメ	3.5
	アカゲラ、ウグイス、 カワウ、キジバト、 コゲラ、スズメ、 ノスリ、ムクドリ		10	マガモ	3.2

結果でした。過去2019年度から2023年度までの森林サイトでの記録種数は89~113種で、2024年度は、最近6年間の中では最も少ない種数となりましたが、差はサイト数、種数ともに小さいことから、過年度と大幅に異なるということではないと考えます。草原サイトでは、今年度は95種(14サイト)で、2019年度から2023年度までの記録種数は、63~92種(9~13サイト)でした。最近6年間で最も多い種数、サイト数でしたが過年度との差はわずかであり、森林サイト同様に、大きな変化はないと考えます。

### 出現率と優占度

次に、森林サイト、草原サイトにおける出現率、優占度の上位種を表1、2に示し(出現率:ある種の出現サイト数÷調査サイト数×100、優占度:サイトでのある種の個体数÷総個体数×100を平均したもの)、森林サイトにおける過去6年間の上位種の出現率の変化を図1に示しました。

一般サイトは5年かけて約420サイトを調査します。調査

表 3. 2019年度越冬期の出現率の上位10種

a) 森林(n = 46)			b) 草原(n = 11)		
順位	種名	出現率	順位	種名	出現率
1	ヒヨドリ	95.7	1	ツグミ	100.0
2	コゲラ	93.5	2	ヒヨドリ	100.0
3	ハシブトガラス	91.3	3	ハシブトガラス	90.9
4	シジュウカラ	87.0		ホオジロ	90.9
	ヤマガラ	87.0	5	トビ	81.8
6	エナガ	78.3		ハシボソガラス	81.8
7	メジロ	73.9	7	シジュウカラ	72.7
8	ウグイス	65.2		モズ	72.7
9	カワラヒワ	58.7	9	スズメ	63.6
10	ツグミ	52.2	10	カワラヒワ	54.5
				キジバト	54.5
				ハクセキレイ	54.5

サイトが概ね同じである5年前の2019年度の結果(表3)と2024年度の結果を比べてみます。現時点で集計可能な今年度のデータで、森林サイトの出現率で8位、9位のカケスとシロハラ以外の8種が過年度も10位以内に入っています。順位は多少異なりますが5年前と種構成がほぼ同じという結果から、森林環境に大きな変化は無いことがわかります。一方、毎年、調査サイトの構成は変わりますが、出現率の経年変化を見ると、ヤマガラとウグイスが減少傾向にみえます(図1、太線)。ウグイスの減少は、シカによる下層植生の食害の影響で生息環境である藪(やぶ)が減少していることが原因と考えられます(環境省自然環境局生物多様性センター 2025b)、繁殖期では、ヤマガラとウグイスは近年増加傾向です(環境省自然環境局生物多様性センター 2025a)。モニタリングサイト1000(以下 モニ1000)では同じサイトを繁殖期と越冬期に調査しているの、繁殖期にウグイスがいるということは、繁殖のために利用する藪がそのサイトに存在するということになるので、単に藪の減少ということではなさそうです。原因はわかりませんが、もしかしたら近年の気温上昇など何かしらウグイスとヤマガラに共通する原因が隠れているのかもしれない。このような変化をとらえることがまさにモニタリングといえます。優占度については、スペースの都合で2019年度の結果は掲載していませんが、2024年度と2019年度の種構成は上位7種で同じで、大きな変化はありませんでした。

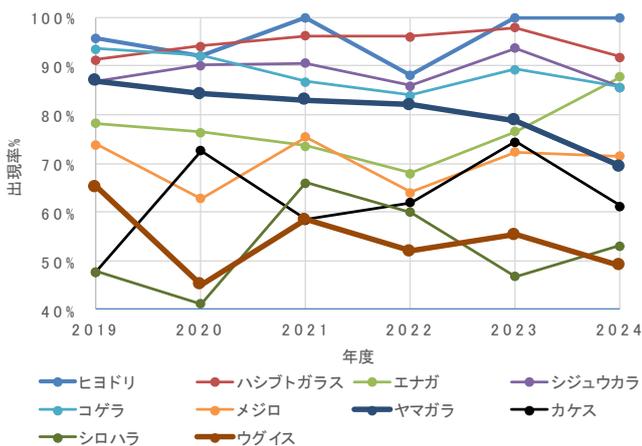


図1. 過去6年間の森林サイトにおける出現率上位種

## 森林でアオジが減少

アオジは北海道の林や本州の標高の高い明るい林などで繁殖し、秋から春の越冬期は本州以南の山地から低地の林や林縁、藪などで見られます(高野 2007)。越冬期の本州以南では、都市近郊でも緑地のある公園や庭、藪のある林、ヨシ原などではよく見かけるわりと身近な種です。小群で見かけることもあります。藪では姿が見えないことが多いですが、「ジッ」という鳴き声はよく聞きます。出現率では毎年概ね15~20位に位置しています。近年、森林の越冬期調査をしていて、アオジが少ないと感じていました。そこで、アオジのサイトあたりの平均個体数の経年変化(図2)を図示してみました。すると、なんと個体数では15年で約半数に激減していることがわかりました。「なんだアオジか」と思うくらい身近でありふれた鳥が、ふと気



アオジ(写真: 奴賀俊光)

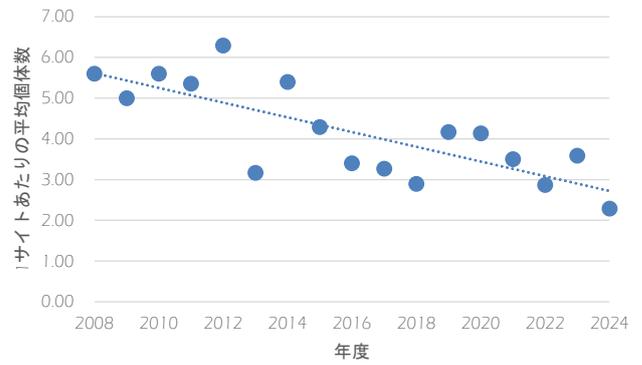


図2. アオジの平均個体数の経年変化

づくど激減している、ちょっと怖い状況です。

減少の要因としては、ウグイスの減少と同じように、シカの食害による下層植生の減少により、アオジの生息環境が減少した可能性があります。または、林の遷移が徐々に進み、藪や林縁環境が、成熟した森林環境に変化しているからかもしれません。

アオジのように、徐々に減少している種は、毎年モニタリングしていてもなかなか減少していることに気づきにくく、ある程度の時間がたって、減少している、とわかります。昨年度、モニ1000の各生態系でとりまとめ報告書が公開されましたが、調査を継続することと一定期間でのとりまとめというのは大事だとわかります。今後のアオジの出現率や個体数の変化に注視していきたいと思います。

## 調査へのご協力ありがとうございました

昨年度、モニタリングサイト1000第4期とりまとめ報告書概要版が発行されました。今回話題になったシカ食害の影響や気候変動の影響、外来種の分布拡大等についての解析結果が掲載されています。多様性センターHPで公開されていますので、ぜひご覧ください。モニタリングの継続実施には、大勢の人々のご協力が欠かせません。引き続き、皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。

2024年度越冬期の一般サイト調査には、81名の方のご協力をいただきました。最後にお名前を記し、お礼に代えさせていただきます(敬称略、五十音順)。阿部智、井上伸之、磯海弘子、衛藤民子、猿子正彦、岡田功壮、岡本浩、荻原千恵美、梶原剛二、関海月、丸山健司、吉田保晴、宮原明幸、宮内亜直、橋本了次、原田修、戸邊進、五百蔵聡、後藤聡、広塚忠夫、荒井悦子、荒隆博、黒田治男、今堀英明、佐久間仁、佐藤一博、佐藤孝、山口雅生、山田大志、山本貴仁、室瀬秋宏、重松尚紀、小山信行、小野島学、松田久司、森茂晃、神谷芳郎、星野由美子、清野信行、西村泉、西田好恵、青木雄司、石川滋、川崎康弘、前田幹雄、前田佑惟、増瀬翔太、大井智弘、大河原吉衛、大橋正明、大塚之稔、大徳尚人、丹下研也、中村公義、中澤和則、津森宏、辻秀之、田中義和、田辺英樹、渡辺貴美恵、渡辺健三、奴賀俊光、東條秀徳、藤原奈千、内藤明紀、日比野政彦、八木聡、飯田直己、飯澤可奈江、飯澤凜、尾崎高博、堀田昌伸、野田美治、矢本賢、柳田一郎、柳田弘子、柳田直子、柳田和美、鈴木正之、鈴木利典、齋藤都久美。

引用文献

- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2025a. モニタリングサイト1000 陸生鳥類調査情報, Vol. 16, No. 2. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田市.
- 環境省自然環境局生物多様性センター. 2025b. モニタリングサイト1000 森林・草原調査2004-2022年度とりまとめ報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田市.
- 高野伸二. 2007. フィールドガイド日本の野鳥 増補改訂版. 日本野鳥の会, 東京.

# 結果速報

## 2024年度 コア・準コアサイト鳥類調査 越冬期結果報告

植村慎吾（バードリサーチ）

### バイオマスの値に長期的な増減はなし

2024年度の越冬期はコア12サイト、準コア5サイトの計17サイトで調査を行いました。

越冬期は年変動が大きく、記録種数、バイオマス（記録鳥類の総体重）共に、年によって多かたり少なかたりすることがあります（表1）。図1は2009年度から2024年度まですべての年で調査が実施されている12サイトについてバイオマスの合計値の経年変化を表したものです。これまでのところ、有意な増減はありません。

表 1. 2009-24年度越冬期コア/準コアサイトのバイオマス(kg/10ha)

サイト名	越冬期バイオマス(kg/10ha)																			
	2009	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24				
雨龍	2.8	6.7	0.6	1.0	5.4	2.4	0.3	1.2	2.5	2.1	0.9	0.2	0.7	1.6	0.1	3.6				
野幌						29.5	24.3	16.0	26.4	12.0	11.4				13.0	23.2	51.6			
苫小牧	6.0	25.8	22.6	23.0	23.0	27.7	17.4	15.5	29.0	19.4	5.2	5.2	2.0	6.3	3.6	9.9				
青葉山	79.1				35.5				29.2	19.2	42.4	28.6	23.4	35.3	37.0	28.4	48.2	37.3		
小佐渡	12.0	14.1	18.9	10.5	38.1	8.9	23.2	10.9	10.7	11.7	18.5	7.0	14.5	15.0	11.7	21.5				
那須高原	5.1	2.3	12.7	3.6	4.8	2.6	7.0	3.8	3.9	11.7	20.8	1.8	29.0	1.7	3.7	4.3				
小川	10.6	22.7	10.8	7.4	24.2	12.5	23.7	16.9	25.7	54.0	16.5	22.2	12.7	21.0	9.4	11.7				
大山沢	3.8	2.4	4.4	3.2	1.2	2.3	2.0	2.1	3.0	9.1			4.1	1.8	12.1					
秩父	3.5	3.3	10.4	5.8	8.2	18.2	9.2	4.5	10.6	24.5	8.7	5.2	10.5	7.5	10.2	10.6				
富士	16				6.9				17.0				18							
愛知赤津	9.0	10.8	12.5	7.2	8.2	9.1	10.4	3.9	9.1	1.8	7.7	7.9	3.6	1.3	4.4	7.1				
上賀茂	23.8	15.6	33.1	23.4	24.7	30.2	22.8	21.1	18.1	23.1	25.2	19.1	26.8	18.6	20.1	14.7				
宮島	115					40					24					36				
市ノ又	3.2	5.4	4.6	2.7	2.8	8.9	6.3	11.0	7.8	9.0	5.6	15.6	15.9	4.8	19.4	4.8				
椎葉	7.5				12				14				4.5							
綾	5.0		3.9	4.3	7.0	6.2	7.3	6.4	6.8	13.5	6.5	3.7	5.6	8.8	6.5	7.7				
田野	12.6	13.6	5.6	9.7	8.4	15.8	8.1	9.4	24.3	16.5	6.7	5.2	5.7	12.8	9.4	8.7				
奄美	35.2	37.8	14.0	16.6	18.6	26.7	30.0	25.0	30.3	23.8	26.2	24.3	24.4	30.0	38.5	11.1				
与那	39.0	30.4	23.3	20.0	23.0	22.5	30.3	28.0	27.8	23.6	24.3	20.0	26.2	23.0	15.9	10.9				

※2017年度の和歌山サイト、2022年度の苫小牧サイトでは1回しか調査を行っておらず、過小評価である。



図1. 12サイトで記録された鳥のバイオマスの合計値の経年変化

### 与那サイトでホントウアカヒゲが減少

沖縄島の与那サイトで、ホントウアカヒゲが減少していることがわかりました（図1）。与那サイトがある沖縄島北部のやんばる地域では、ホントウアカヒゲ、ヤンバルクイナ、ノグチゲラと、沖縄島に固有の鳥類の分布域が軒並み回復傾向にあり、マングース対策の効果があがっていると考えられています。ホントウアカヒゲはマングースの影響で国頭、大宜

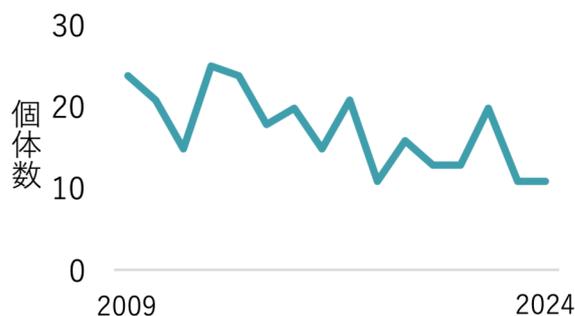


図 2. 越冬期の与那サイトでのホントウアカヒゲの個体数の経年変化

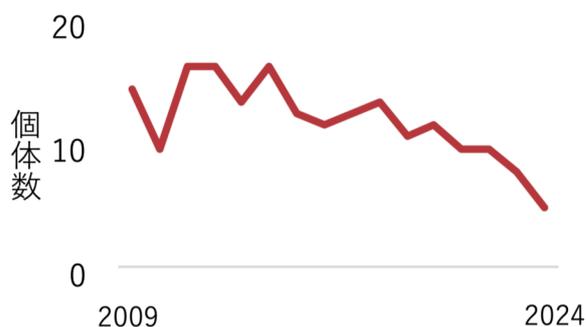


図 3. 繁殖期の与那サイトでのホントウアカヒゲの個体数の経年変化

味、東の3村に生息域が狭まっていたものの、2025年の繁殖期には名護市での繁殖が確認され、生息域の拡大が示唆されていました。一方で、与那サイトでは調査開始から現在までの間に、有意に個体数が減少してきています。減少傾向は繁殖期にも同様に確認されました（図2）。

減少は急激なものではなく、2014、15年ごろから緩やかに継続しているように見えます。また、5つの定点のうち記録されなくなった地点があるわけではなく、全体的に個体数密度が低くなっているようです。与那サイトでは2012年の大型台風で植生が大きな影響を受けており、その少し後から、植生の変化の影響を受けているのかもしれませんが、また、台風による攪乱（かくらん）の後、林内に空間が空いたことで捕食者のハシブトガラスが侵入しやすい環境になった可能性も考えられます。定点から50 m以内で記録されたハシブトガラスの個体数に増減の傾向はみられていませんが、行動圏の広いハシブトガラスの増減はとらえにくい可能性があります。沖縄島でデータをとっている研究者とも連携して、他のデータからも減少傾向をとらえられるかどうかと、その原因を検討していこうと考えています。

### 調査へのご協力ありがとうございました

2024年度越冬期の現地調査では、井上伸之、岩本富雄、打和侑菜、江崎逸郎、川崎慎二、木村史希、佐藤一博、城崎菜乃、高美喜男、渡久地豊、中村豊、濱田哲暁、平野敏明、柳田和美、梁瀬桐子（敬称略）ほか、多くの方々のご協力をいただきました。皆様に感謝いたします。

#### 参考文献

Yagihashi, T., Seki, S.-I., Nakaya, T., Nakata, K., & Kotaka, N. (2021). Eradication of the mongoose is crucial for the conservation of three endemic bird species in Yambaru, Okinawa Island, Japan. *Biological Invasions*, 23, 2249-2260. <https://doi.org/10.1007/s10530-021-02503-w>

## 調査者・調査協力員の声

**支笏湖一般サイト（ホール パトリック・ホール 彪吾  
（ウトナイ湖サンクチュアリサポーター））**

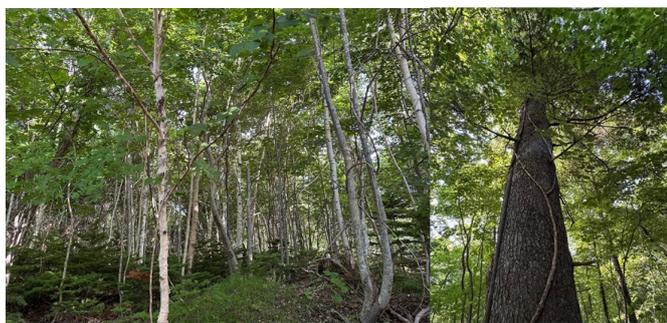
モニタリングサイト1000の調査は、一般サイト、コア・準コアサイトともに全国の調査者の皆さんに調査をお願いして実施しています。今回、立ち入り禁止のため調査継続が難しくなった「支笏湖野鳥の森」サイトの代わりに新設した一般サイト「支笏湖」の新しい調査員として、ホールさん親子に繁殖期の調査を実施していただき、支笏湖サイトの様子や調査の様子を紹介していただきました。ちなみに主に鳥を識別するのは野鳥に詳しい彪吾（ヒューゴ）くん（中学生）です。越冬期調査もぜひお願いしたいと思います。



パトリックさん(左)と彪吾くん(右)

### 支笏湖サイト

今回の調査は、支笏洞爺国立公園内にある静かな森林で行いました。調査地点の入口には、「支笏洞爺国立公園」の名前が書かれた大きな木製の案内板があり、森の中は高い木々に囲まれ、地面には湿ったコケや夏の緑が広がっていました。とても静かで、鳥たちを自然な姿で観察するのにぴったりの場所でした。



調査地の林(左)と大木(右)

### 森でのひととき

早朝に森に到着すると、少しずつ鳥たちのさえずりが聞こえてきました。姿は見えなくても、森の中にはたくさんの動きや音があり、生きものたちの気配を感じました。キビタキやクマゲラ、センダイムシクイ、ツツドリなどの鳥たちに出会うことができ、ミヤマクワガタやキマダラセセリなどの昆虫

も見ることができました。森の中を歩いていると、メスのシカと2頭の子ジカが現れ、少し立ち止まってから静かに茂みの中へと消えていきました。特に印象に残ったのは、クマゲラがすぐ近くの倒木に舞い降りて、幼虫を探して力強くつついていた姿です。私たちの存在を気にすることなく、自然な行動を見せてくれました。2日目の朝には、道のそばで遊ぶキタキツネや、ヒナを連れたキジの親子を見かけました。また、エゾクロテンが素早く走ってきて、私たちを一瞬見てから茂みに消えていく場面もありました。



調査地の林道



調査中に見つけたクマゲラ(左)、ミヤマクワガタ(中)、キビタキ(右)

### スポットセンサスを実施して

調査では、目視と鳴き声を通じて確認できた鳥の種類をすべて記録します。早朝にはあらゆる方向から鳥たちの声が聞こえ、それぞれの鳴き声を聞き分けようと集中していると、あっという間に時間が過ぎていきました。葉が生い茂る時期だったため、目で鳥を見つけるのは少し難しく感じましたが、鳥の識別そのものは全体的にスムーズにできました。また、調査地点の森林構造をうまく伝えるための写真の撮り方を工夫するのが、難しい点のひとつでした。

調査を通じて感じたのは、鳥の個体数を把握するだけでなく、簡単な植生調査もあり、環境全体の状態をモニタリングするために欠かせない活動だと思いました。自然を見守り、守っていくための調査に関わったことはとても意味のある経験でした。



調査中の彪吾くん

### 調査を終えて

静かな森が目覚めていく様子を体験できたことは、きっと一生忘れません。こうした体験を通じて、自然の大切さや守ることの意味を改めて感じました。今回の調査に参加できたこと、そしてウトナイ湖サンクチュアリのレンジャーの皆さんや、ネイチャーセンターサポーターズの皆さんに心から感謝しています。皆さんからの鳥類調査のアドバイスやご指導、サポートがあったからこそ、この体験をより深く味わうことができました。

## 日本鳥学会2025年度大会でとりまとめ報告 の自由集会をおこないました

植村慎吾（バードリサーチ）

### 鳥類調査を実施している5つの生態系から報告

先日、札幌市の北海学園大学と北海道大学で日本鳥学会2025年度大会が開催されました。開催初日の9月12日に、昨年度公表したモニタリングサイト1000第4期とりまとめ報告書に関連する自由集会を企画し、鳥類の調査を実施している5つの生態系から、それぞれ報告を行いました。



図1 自由集会会場の様子

#### 自由集会名

モニタリングサイト1000の20年の調査結果から見えてきた日本の鳥の変化

#### 発表プログラム

- モニタリングサイト1000調査の目的と意義  
雨宮俊（環境省生物多様性センター）
- 森林・草原（陸生鳥類）の成果報告  
植村慎吾（バードリサーチ）、奴賀俊光（（公財）日本野鳥の会）
- 里地の成果報告  
藤田卓・福田真由子・小林彩（（公財）日本自然保護協会）、片山直樹（農業・食品産業技術総合研究機構）、赤坂宗光（東京農工大学）、内田圭（東京都市大学）
- 陸水域（ガンカモ類）の成果報告  
姜雅琺（バードリサーチ）
- 沿岸域（シギ・チドリ類）の成果報告  
守屋年史（バードリサーチ）
- 小島嶼（海鳥）の成果報告  
富田直樹（山階鳥類研究所）

前号のニューズレター（vol. 16 (2)）でお知らせした陸生鳥類の成果報告の他に、里地からはスズメやセグロセキレイなど出現頻度の高い鳥の15%で個体数が減少したこと、陸水域（ガンカモ類）からは、トモエガモの急増やキンクロハジロなどの減少、温暖化によるヒシクイの越冬パターンの変化、沿岸域（シギ・チドリ類）からは干潟や湿地の減少や質の悪化によると考えられる、シギ・チドリ類が20年間で半減したという報告、小島嶼（海鳥）からはドブネズミの防除によってコシジロウミツバメが回復傾向にあるという成果な

どが報告されました。

会場では約60名の聴講があり、活発な質疑と議論が交わされました。鳥学会参加者のモニタリング1000事業への関心と期待を感じました(図1)。

自由集会の後は、希望者で懇親会を行ないました。それぞれの生態系の担当者が一堂に会して意見交換をすることはなかなかないため、貴重な機会となりました。自由集会の参加者も懇親会に参加していただき、自由集会の時間に話さきれなかったさまざまな話題を共有したり、解析のヒントを得ることもできました。それぞれの生態系やサイトでの調査の様子ややりがい、今後の課題などをお聞きしました。



図2 盛り上がった懇親会の様子

### 一般サイトのポスター発表

今回は自由集会のほかに、陸生鳥類の一般サイトからポスター発表もしました。

- モニ1000陸生鳥類（一般サイト）からわかった北海道の鳥類の増減  
奴賀俊光・森本元・葉山政治（（公財）日本野鳥の会）

一般サイトのうち北海道の鳥類の個体数の増減を解析し、森林サイトでは、繁殖期のアオバトや越冬期のキバシリが全国の傾向と同様に増加、繁殖期のアオジやコルリが減少していることが分かったことを紹介しました。草原サイトでは、繁殖期のノビタキやシマセンニュウなどが減少していました。

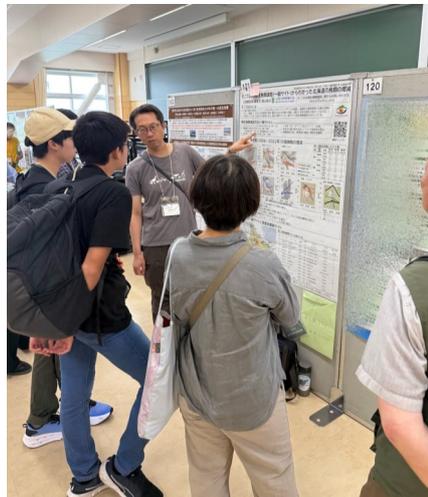


図3 ポスター発表の様子

